第 19 回　生老病死－東日本大震災に思う

宮下　晴輝（大谷大学　教授）

2011 年 11 月５日

生老病死 － 東日本大震災に思う

早川　皆様、こんばんは。お足元の悪いところたくさんお集まりくださいまして、ありがとうございます。時間になりましたので、ただいまより第 19 回名田庄多聞の会を開催いたします。本日は大谷大学の宮下晴輝先生に来ていただきました。宮下さんとは古い友人で、多聞の会の第１回の講師としても来ていただいています。第１回の時は、お釈迦様はなぜ出家されたかというところで話が終わったのですが、今日はその続きを期待していまして、東日本大震災と生老病死ということでお話を伺うことになっています。それではお願いいたします。

到達点からでなく出発点から

宮下　皆様、こんばんは。さっき紹介がありましたが、６年前の第１回の時によせていただきまして、この度もということで大変光栄でございます。前回はそこでお話しは終わっているので、前回の続きをやるつもりはございません。あそこで言いたかったことは終わっているので、今回は基本的には繰り返しになります。

今回、生老病死という言葉を掲げましたが、生きていることは苦しみばかりであるということでしょうね、言葉の意味としては。四苦八苦という言葉があります。これはお釈迦様が初めて説法されたときに出てくる言葉です。そのことを書いたものをお手元との資料として配りま

した。（資料『転法輪経』（最初の説教））これを解説しようとするのではないのですが、またあとで読むかも知れません。この資料は、四苦八苦という言葉が出てくるもとを示しています。

6年前の時は老病死の苦しみということを申しました。なぜそういうことをお話ししたかというと、仏教の到達した答え、それは教えでもあるのですが、その意味を知りたい知りたいと思うわけですが、その到達点からではなくて出発点から考え直さないと教えの言葉はなかなか理解できない。どんなふうに受け止めたらいいか分からない。受け止める心を問題にしながら出発点から見るべきであろう、ということでした。今回も基本的にはそういうことになるだろうなと思います。

ただ、前回と違いまして今回は大変な千年に一度といわれるような地震と津波でした。ただならぬ状態の中でお話しさせていただくことになりました。そういうテーマと関わってと頼まれていたこともありまして、そういうつもりで話してみようと思っています。最初、地震や津波のことでお話しさせていただきます。

釜石に友人を訪ねた

9月の初旬、津波から半年くらい経った頃でしたが、友人が釜石に住んでいまして、そこに行ってきました。私より少し若いのですが、夫婦子供連れで縁があって釜石のお寺に入ったのです。お寺に入ってちょうど一年経って少し落ち着けかけたかなというころに津波が来たのです。お寺そのものは高台にあって、古いお寺ですが、かなり危ない状況でしたが、津波そのものの影響はありませんでした。皆様も行かれたかも知れませんが、本当に町は破壊されていました。釜石は新日鉄の製鉄所があり立派な港のあるところですが、でっかい船が埠頭に乗り上げて、つい一ヶ月ほど前にやっと海に戻したという報道がありました。あの辺りは地盤が1メートル近くも沈み、埠頭と海面がすれすれなんですね。ぴちゃぴちゃと波が来ていました。毎夕、上げ潮になると水がが一っと上がってきていました。色々案内してもらったのですが、火葬場がいっぱいで入らなくて山形県の火葬場を借りて、大変だったと言っていました。

友人は「宮下さん、ボランティアに来なくていいですよ」と言うので、なぜと聞くと、「意気込んでボランティアにやってきて地面を掘っているとまだまだ遺体が出てくる、そんな状況なので」と言ってくれました。残った人たちは死者たちに直面せざるを得ないのですね。

たくさん亡くなられました。今、例えば、タクシーの運転手さんなんかから、タクシーに乗ったお客が途中で消えたとか、そう言う幽霊話・怪談話が広がったということも聞きました。それくらいみんな衝撃があった。そういう状況はまだまだ続いているように思いました。そんな話しを聞きながら町を案内してもらいましたが、彼はお寺ですので、門徒さんがかなり多く被災しておられまして、彼はそこの寺に入ってまだ1年足らずで、そこには年老いた住職さんもおられるのですが、お寺に貯まっている金を全部くずして門徒さんを回って分けてきました

と言っていました。住職さんとトラブルを起こしているのでないかと思いますが、彼なりの責任の取り方をしようとしたのかなと思っています。

ある門徒さんの家に連れて行ってもらってその家を見せてもらいました。その家は高台にあったのでそこまでは水が来なかったので、まわりの人が何組かその家に避難してきたのだそうです。その家にあった衣類や食糧を出して皆で3ヶ月くらいそういう生活をしたと言っておられました。その家の奥さんが一番苦労されるわけですね。血圧が１５０を超えて限界ぎりぎりだったみたいです。3ヶ月くらいで皆さん仮設住宅に移ることができて、そうしたら血圧がさっと下がったそうです。実際そうなんだろうなと思いますね。そういう状況に直面したら心が動いてそうせざるを得なくなる、だけど精神的にも肉体的にも限界というものはあるのだろうと思います。それは本当によく分かります。

今でもいろんなことがあって、多くの人は仮設住宅で生活しておられますが、仮設住宅ができるまで時間がかかっていますが、最初のうちにできた仮設住宅より後で建つほどよくなっていくようですね。生活の使い勝手が違ってくるようです。住んだら住んだでそこでいろんなことが出てきて、今でも被災地の方は苦労しておられる。僕らには想像出来ないようないろんな苦労をされているのだなと思います。

災害を通して今まで見えなかったものが見えてくる

私は今大谷大学にいますが、大阪大学の学長をされていた鷲田清一という先生、哲学者ですが、その先生が任期を終えられて大谷大学に来られました。夏に講演がありましてその題目が「震災と哲学」でした。鷲田さんは有名な哲学者でいろんな本を書いておられます。そのときの講演を少しだけ紹介します。

「災害を通して今まで見えなかったものが見えてくる、そういう災害であったのでないか」。このようなことをまず言われました。そういうことの例として言われたのだと思い聞いていたのですが、彼の友人が仙台に住んでいた。仙台の街も地震の後電気も水も来なくなった。夕方になると家は真っ暗ですから、アパートに住んでいた人たちがみんな下りてくるのだそうです。道まで。みんな下りてくる。知らない人でも挨拶していく。そして話をする。そういうことが一時あったそうです。鷲田さんの友人は感想として、仙台の街が開いた、そういう感想を持ったそうです。そういうのが1週間続いたようです。1週間たって電気が復旧した。そうすると、みんな個人個人の生活に帰って行く、アパートに帰って下に下りてくることがなくなった。街が閉じてしまった。そんな感じを受けたと話されました。街は一度開いたのだけれどまた閉じてしまったと。

もうひとつ、今まで見えなかったものが見えたことについて、鷲田さんは、これは、少し古いですが、文芸評論家の寺田透の言葉を引用されました。「文明が進めば進むほど、天然の暴威による災害がその激烈の度を増すという事実がある」。文明が進めば進むほど、それだけ自然の災害によって激烈に壊されたりする度合いがますます増えていく、

これは寺田透が昭和17年頃に言った言葉です。特に都市生活でインフラが壊れると水も飲めなくなる。一挙に生活ができなくなってしまう。津波でやられた後の街は、本当に住めなくなった状況です。都市化していなければ、やられてもまた戻って住めるようになるかも知れないけれど、都市生活では災害にであうと大変な状況になる。突然原始人の生活に引き戻されたような状態になる。それは文明が進めば進むほどひどい。われわれはそういう生活をしているのだ、ということがあらためて見えた。そういうことをおっしゃっていました。

最後に締めくくりとして、これはよく引用されるのですが、アメリカのインディアン、ネイティブアメリカンですが、彼らの言葉に、「大地は先祖からの贈りものではない。それは、未来の子孫からの預かりものだ」。ネイティブアメリカンのホピ族の言葉です。鷲田さんはこの言葉を取り上げられて、大地は、先祖代々から来たのでなく、未来から預かっているのだと。そこから、鷲田さんは、未来を根拠にした生き方が大事なのでないか、そういうことを提案されて講演を終えられました。

今日は、私も鷲田さんの提言を借りまして、今まで見えていなかったものが見えてくる、そういうことを私なりに考えてみようかなと思います。

仙台の街が開いた、そして閉じた、そういう話がありましたが、われわれにとって一人一人の心が開かれて交流が始まる、それは本当に喜びです。だけど、一人一人に戻っていけばその開かれた心が閉ざされる。両方とも事実ですが、街が開くことが、つかの間だったけれど垣間見ることができた。本来なら喜びとすることがあるのだけれど、そういう願いがあるのだけれど、実際はそうでない生活を送っている。そういう事実が見えた、ということのひとつかなと思います。

私が生きているのは奇跡だ

『つなみ　被災地のこども80人の作文集』（文藝春秋　8月臨時増刊号）。これは小学生から高校生までの作文を集めた本ですが、かわいい子供の写真や原稿用紙の手書きの字がそのまま載っていたり、とても興味深い本です。ここには、子供たちの飾りっ気のない、素朴な直接的な言葉で津波の体験が綴られています。これを読むと、あの時あそこではこういうことが起きたのだなということが、とてもよく伝わってきます。

その中で、子供たちが、今回の地震や津波を通して私たちはこんなことを学びましたと、いろいろいっぱい書いています。「こんなことを学びました」と書いていますが、それはさっきの言葉で言えば、今まで見えていなかったものが見えてきました、ということですね。少しだけ紹介させていただこうと思います。

とても端的な率直な言葉で言っているのは、「一日一日をいま楽しく過ごし、生きているのは奇跡です」。「私は毎日生きている」。これは中学校2年生の女の子ですが、そういう言葉を載せています。もっともっとたくさん書いていますが、「私が生きているのは奇跡だ」と言っている。

そういう実感を支えているものがあるように思います。「震災で家族や友人が亡くなってしまった人たちがたくさんいます。私の家族は全員無事でした。いつもだったら当たり前のことでも、今はそのことがすごい奇跡だと思っています」。こんなふうに続けています。「私の命は音をたてて動いています」。そんなふうにも言っています。私の命は音をたてて動いている、そういう私の命が今あることを喜ぶ、その喜びはその子の家族と一緒にいることでないかと思いますね。一体になった喜びを語っている。

もちろん、この作文集の中には、両親ともなくなった子の作文もありました。小学生ですが、その作文では、津波から必死に逃げたこととか、陸前高田の松が一本を残してすべてなくなったこととか、書かれていますが、両親のことは一言も書かれていない。それは語れないのだと思います。言葉にはできない。

そのような子もいましたが、多くの作文は、津波から必死に逃げた強烈な体験と、離ればなれになりながら不安な中でやがてお母さんやお父さんと会うことができた、そういう喜びがおおいですね。

再会できた

たとえば、「私は妹と弟とおじいちゃんは同じ場所にいたけれど、会えないお父さんとお母さんが心配で少しも眠れなかったです。次の日の朝、お父さんが来たときはすごく嬉しかった。そして、2日後にお母さんと会えたときは本当に嬉しかった。それまで大切にしていたものがなくなったことはつらくて悲しいけれど、でも、ものはなくなっても、家族がこうして生きていっしょにいられることが私にとって何より大切です」。これは小学校6年の女の子ですね。こんなふうに、恐ろしいほどの恐怖の体験をした子供たちが、あらためて自分にとって何が大切なのかを、作文のなかで素直に表現している。

また、あるいはこういうふうにも言っています。小学校3年生の女の子です。これはこの作文を編集した人も言っていますが、おじいさん、おばあさんが圧倒的にたくさん出てくるのです。おじいさんとおばあさんと一緒に逃げた、そういうのはいっぱい出てきます。そのあとに、お父さんやお母さんが仕事場などからやって来て会うことができた、そういうのが多いです。「おじいさんと私とは車に乗って逃げて、おばあちゃんは小学校にダッシュしました」とか、おじいさんやおばあさんと一緒に生活しているのが分かるし、たくさんの兄弟がいたりして、大きな家族で暮らしているのだなという感想も持ちました。

小学校3年生の女の子の作文からもうひとつ紹介します。

この子は弟とおじいちゃんと逃げて、そのあとお母さんがやって来て会えたときのことをこう書いています。

「ママは私と琢磨(弟)を見るなり走ってここに来て、私も最初ぎゅっとして欲しかったけれど、通り過ぎて琢磨に抱きついていきました。次に私ともしました。ママは泣きながらよかったよかったといっていました。琢磨もママが無事だったことを知って泣きそうになりました」

ママが私と弟を見るなり、走ってきた、私も最初ぎゅっとして欲しかったけれど、通り過ぎて琢磨に抱きついていきました。こんなことをを見ているのですね。そのあと、私もしてもらいましたと書いてありますけれど。どんな子もまずお母さんが必要なのですね。とっても大事です。そして、許されるなら、ぎゅっとして欲しいのですね。みんなそんなんだろうなということがよく伝わってきます。

そんな大事なお母さんやお父さんを亡くした子供たちもたくさんいるのですが、だけどこれらの子供たちの作文を読んでも皆明るい。明るくっていい笑顔の写真がこの作文集にはたくさん載っています。いろんなもの、家とか大事なものを失っても家族と再会できて一緒にいられること、そのことがこの子たちの支えになっている。それが基本にありますね。

悲しいけれど

親を失っていたとしても、それはとても悲しいことだけれど、けなげに生きていることを作文に書いている。それは、親を失っていても何らかの助けの手をさしのべてくれている人たちがいるからなのでしょう。

皆、親族や身内が亡くなった悲しい経験をしているのですけれど、それに耐えていることを伺わせてくれる作文もあります。小学5年生の子です。親友のゆーちゃんを失ったのです。

「なんでゆーなのだろうと思う日が何日も続きました。でも、いつまでもなになよなよしているのだと言い聞かせ、友だちの分まで生きようと思いました」

あるいはおばあちゃんをなくした小学校6年生の子は、「おばあちゃんは逃げる途中に津波にさらわれてしまいました。その話しを聞いて私は泣きました。でも悲しいのは私だけでないので、泣いちゃだめだと思いました。何とか泣くのを止めました。」

彼らにとって、彼女らにとって、悲しみに耐えている、そんなふうに書いているのだなと思います。全部紹介したいくらいです。いろんなことがたくさん出てきます。

もう少し紹介します。

未来を信じる

未来を信じる、そういう言葉を残している子もいます。中学2年生です。「大好きだったあの家にもう帰れないと思うと悲しくなるが、未来はあると信じている」

また別の子は、これは作文を書いたあと、これを読んでくださいと手紙に書いた言葉ですが、「笑顔の先には明日があると信じて生きていきます」

このように、未来や明日を信じると書いている子がいます。悲しい事実があるのだけれど、未来を信じて生きようと書く子供たち。そういう子供たちの背景には、そういうことを信じられる現実が、そういえ

る子供たちを支えている現実があるのかなと思います。笑顔という言葉がよく出てきます。笑顔で、笑顔でと。自分を叱咤しているのかも知れませんが、笑顔でというのは、現在を喜んでいることを示す言葉でないかなと思います。親を失った子でも、優しい手をさしのべてくださる人がいれば、そういう人々がいるのだということを知れば、笑顔を取り返すことができる。どんなに悲しいことであっても、家族であったり、あるいは外から支えてくれる人がいたりすれば、自分を丸ごと受け入れてくれる世界があるのだと知った子は、明るくて強い。

そういうことを素直に喜び、信頼している。そういう姿がよく分かります。最初は津波の恐怖などを強く書いていますが、そのあとは家族と出会えた喜びなどを非常に素直に表現しています。信頼している姿がよく伝わってきて、人間が希望を持って生きていく姿を原型のような形で示してくれています。彼ら自身も今まで見えていなかったものが見えてきた、今まで当たり前だと思っていたことが実は最も大切なものであった、そういうことを経験したのだと思います。

人間を支える大地、信頼関係

何もかも全てを失って、何ひとつ所有するものがなくなったとしても、信頼できる家族や人々とともにいることができるならば、それだけで私たちは充分によく生きることができる。そのことを子供たちの作文がよく示してくれています。

先ほど仙台の街の例を言いましたが、同じ言い方をしますと、今子供たちが気がついた世界は、子供たちとともに開かれた世界であると。仙台の街が開いたというのなら、子供たちの世界が開いたともいわなければならないかも知れません。これはよく考えなければいけないことかも知れませんが、仙台の街は電気の普及とともに閉じていきました。それと同じように、被災地がやがて復興していくとともに、子供たちが垣間見ることができた世界もまた閉じていくかも知れない。そうなるかも知れませんが、それでも人間にとって信頼ということがどれほど大切なことであるか、そのことを知ったという事実、それは消えることはない。

信頼することがあるからこそ、私たちは信頼できるものに身を任せて、安んじて生きていくことが成り立つのだと思います。信頼できるものが何ひとつつなければ、生きることができなくなると言ってもいい。そういう意味で信頼関係とは人間を支える大地である。

今、人間の「大地」と比喩的に使いましたが、それに対して自然の大地というものがあり、自然の大地はふだんは揺るぎなく安定している、そのことは当然である、そういうことを前提として生きていますが、そういう意味では、人間の大地も当然のこととして、空気のように意識せずにそれに身を任せて生きていると言ってもいい。しかし、今回、千年に一度と言われた地震、自然の大地は大揺れに揺れた。それと同時に、実は人間の信頼関係も、必要なのだけれど、きわめて不安定で、もろいものでもあるわけです。今度の災害を通して、子供たちに今まで

見えていなかったものが見えた、あるいはそういうことをわれわれが子供たちの経験を通して教えてもらった。

人間にとって何が大事であるか、何が大切であるか、それを見たか見なかったのか、それは決定的な差違だと思います。仙台の街がやがて閉じたように、大切なものを見、大切なものを知ったとしても、それだけでその事実を揺るぎない形で持ち続けることはなかなかできない。そういうことを子供たちはいつかどこかで学んでいくのでないかと思います。われわれにとって信頼関係はとても大事なもので、われわれはそれを求めているわけですが、しかし、大事だということだけで揺るぎのない信頼関係を生きていけるわけでもない。これはわれわれにとって大きな問題だと思います。今、子供たちは自分が得たものに素直に喜んでいるけれど、今度は子供たち自身が成長して親になっていく、いろんなプロセスで信頼関係を築く側に回っていきます。

震災を通して感じていることは以上のようなことですが、そういう問題を、仏教という問題と関係させながら、次にお話ししてみようと思います。

四苦八苦

今日のタイトルに、生老病死と言う言葉をあげておきました。先ほどは四苦八苦といいました。八苦の中に「愛別離苦」というのがあります。聞いた方もいらっしゃるかと思いますが、四苦八苦について資料を持って来ましたので、まずそれを見てください。四苦八苦ってなにかと思われるかも知れませんので、言葉だけ確認しておきましょう。

「比丘たちよ、これが苦という聖なる真実(苦聖諦　くしょうたい)である。すなわち、生まれることも苦であり、老いることも苦であり、病むことも苦であり、死ぬことも苦である。」

ここに、生まれること、老いること、病むこと、死ぬこと、生老病死が出ています。これが四苦です。最初にお釈迦様は、苦しみがあるということを説いておられる。さらに続けて、「憎いものに会うことは苦であり(怨憎会苦　おんぞうえく)、愛するものと別れることは苦である(愛別離苦　あいべつりく)。欲するものが得られないのも苦である(求不得苦　ぐふとくく)。要約して、五取蘊(ごしゅうん)は苦である(五取蘊苦ごしゅうんく　五盛陰苦　ごじょうおんく)。」

最初の四つと、今出てきた四つを合わせて四苦八苦です。

愛別離苦

四苦のあとに、「愛するものと別れることは苦である(愛別離苦　あいべつりく)」と出ています。今回、文字通り、何万という愛別離苦があったのです。この愛するものと別れた苦しみ、愛別離苦を受けた、お釈迦様のお弟子さんの話をします。女性のお弟子さんです。キサー・ゴータミーという名前です。お弟子さんになったきっかけの話です。

キサー・ゴータミーは生まれてすぐの子供を亡くしてしまった。死ん

だことは自分にとって耐えられないことなのですね、亡骸を抱えて、なんとかよみがえらせて欲しいといって町中を気が狂ったようにして歩き回っていた。町の人はかわいそうだと思うけれど、どうしてやることもできない。あるひとが、お釈迦さんという方がいるからそこに行きなさいと勧める。キサー・ゴータミーは亡骸を抱えながら訴える。この子を生き返らして欲しいと。お釈迦様は、それならば白い辛子種を三つ持って来なさい、とこういうのです。ただし条件がある。辛子種をもらう家はいまだかつて死者を出したことのない家でなければならない。

キサー・ゴータミーは辛子種などはどこにでもあると思い、よかった、行こうと出かける。一軒一軒訊ねて回る。辛子種はどんな家にもある。しかし、どの家も死者を出したことのない家などなかった。それでもキサー・ゴータミーは訊ね歩く。そうしているうちに、はっと気がつく。

死者を出したことのない家などどこにもない。ということは、私はこの子を生き返らして欲しいと嘆き悲しんでいるけれど、同じ悲しみをみんな持っているのだ。そのことに気がつく。私だけがなぜこのような苦しい不幸を受けなければならないのか、その事実を受け入れらなかったが、お釈迦様のいわれたとおり、死者を出したことのない家など一軒もなかった。どこでも同じ悲しみを受け入れて生きているのだということを知って、キサー・ゴータミーは無常を知って出家したと、物語はなっている。多分事実だったのでないかと思いますが。愛別離苦の中で苦しんだキサー・ゴータミーは無常ということを知って出家し変わっていく。

最初、悲しみを受け入れることができなかった。それを、どんな人も私と同じように悲しみ苦しんでいるのだと知って、その悲しみを受け入れることができた。無常を知って釈尊の教えを聞いていくようになる。

これと全くいっしょではありませんが、先ほど読んでいた子供たちの作文に、親友を失った子が、なぜあの親友が死んでしまったのだろうと何日も何日も思ったと書いている。そういうことはよく分かります。すぐにはそういうことは受け入れられないですよね。あるいは、おばあちゃんが津波にさらわれた子は泣き出すのだけれど、悲しいのは私だけでないのだ、泣いてはいけないのだ、「なんとか泣くのは止めました」と書いている。なんとか耐えていこうとしている、そのことを綴っていました。彼らは彼なりに事実を受け入れていこうとしている。

キサー・ゴータミーの場合は乳飲み子なのでつかの間のであいだったかもしれませんが、それでも、充分豊かな生きる意味をともにすることができた。悲しい事実を引き受けても、喜べるような、これでともに充分生きたと言えるような、そういう意味をみつけることが、キサー・ゴータミーの出家としての仕事ですね。仏教の教えを学んでいくということは、確かな意味を見いだしていくということです。無常であるということを知ったということは、無常のなかのつかの間の命であったとしても、それを生きるのには確かな意味があるのだということを明らかにしたい。無常であることを知ったが故に、お釈迦さまの教えを学びたい。これが佛弟子たちの生き方ですね。

もうすこしこの問題を展開させてみます。

老病死の苦しみ

この諸行無常、愛するものとは必ず別れなければならない。必ずです。どんなに愛していても。それが愛別離苦です。その背景には、必ず、老病死の苦しみがある。これが諸行無常の内容です。そういうことが、釈尊の道を求める出発点にあったのです。苦しみの中にある最初の問題、どんなふうにして苦しむのか、なぜ苦しむのか、苦しみの内容ですが、それは結局、死ということです。死の前には何をもってしてもむなしい。何も支えにならないのだ。これが死を迎えたものの苦しみだと思います。どうせ死んでしまう、生きていてなんの意味があるのか。つまり、生きていること、そのことが疑わしい。生きている意味が疑わしい。そういう意味では、疑う苦しみといってもいいかも知れません。自分が今まで支えだと思って喜んできたものが、確かな支えでないということが分かった、信じられなくなった、信じていたものがなくなった、そういう形で疑いが起こってきた。

今日の話の最初で、見えなかったものが見えてきたと言いましたが、そこで一番大事なのは信頼だと言いました。信じること、あるいは、信頼することというのは、何度も繰り返しますが、それは最高に大切なものであったわけです。子供たちにとっては、再会できた喜びのなかにそれが現れています。われわれにとっても、信じ信頼するものがあるということがあって初めて生きることができるので、それは生活の土台であるといえます。一切合切が信頼から成り立っていると言ってもいい。親子関係でも友人関係でも、夫婦もそうです。子供が学校に行くときも、仕事場でも、われわれが関わって生活している一切が、関係全てが、信頼を基礎にして成り立っている。もしも、信頼がなくなったら、途端に苦しみが始まる。大変な苦しみです。学校なら学校に行けなくなる。仕事場なら安心して身を入れて仕事ができなくなる。

だから、信頼を置くことができる、そういうことはわれわれにとってきわめて重要なことです。どんなに頑張っても、頑張るだけでは済まないくらい大きなものです。そういう意味で、先ほどは、信頼が人間の大地であると言いました。われわれにとっての生活の支えであり、よりどころです。信じることができる、それに安心して身を任せることができる、そういうことがあるから生きられるので、もしもそこに信じるということがなくなったら、身の置き場がなくなる。

釈尊が老病死の苦しみとこう言われたましたが、今言ったような信頼関係が死を前にして崩れる、われわれが人生の喜びであると思っていたものが喜びでなくなる、信じるものがなくなる、信じていたものが信じられなくなる、そういうことが「老病死の苦しみ」でいわれている中身だと思います。

死はまさしく孤独です。死は孤独そのものですね。その孤独を癒すほどのものがこの世にあるか、どこにもない。どんな暖かい家族に包まれていても、孤独に苦しむことが起こる。人間どんな人でも起こる。性格の問題でない。あのおじいさん、おばあさんは性格が悪いから苦しんでいるのか、、そんな問題ではない。どこからやってくるのか分からない

寂しさ、やり場のない寂しさ、そういうことが自然と起こる。心の底から信じ喜ぶことができるものがなくなる。

家族とともにある、一緒にいること、そのことが喜びであることは直感的に分かっているが、その一緒にいることが喜べなくなる。時には一緒にいることがつらくてしょうがない場合も起こる。

愛別離苦の前に怨憎会苦ということを言いました。憎いものに会うことは苦である。一方、愛別離苦は愛するものと別れるのは苦であると言うことです。この二つは別々のことのように思われますが、どちらも一緒にいることから起こってくる。一緒にいることから愛することがあり、その愛するものから別れることが苦になる。一緒にいることが反転すると、それは憎しみになる。それはともにあるから憎しみが生まれる。一緒にいることを自ら破壊することが起こる。こういうことは、ある意味で、われわれがよく知っている状況でもあるわけですね。そういうのを、老病死の苦しみと呼んでいるのだなと思います。

老病死の生、生老病死

今回、生老病死と老病死の前に「生」を入れました。これは釈尊自身がそう言っておられるのですが、生まれることも苦であり、老いることも苦であり、病むことも苦であり、死ぬことも苦である。いままで老病死・老病死と言ってきましたが、釈尊の出発点は老病死なのです。生まれたことが最初から問題になっていたのではない。老病死の苦しみはなぜ起こるのかと考えて考えて、そしてその原因がはっきりして仏陀になられるのですが、そのときの最初に、なぜ老病死の苦しみがあるのか、それは生まれたからだと観察された。そういう意味で、最初に「生」が入っている。生老病死と。生まれたからとは、人間として生まれたからということです。

ともにあろうとする心

それでは人間はなんのために生まれてきたのか。それはただ老病死の苦しみを苦しむために生まれてきたのか。人間にのみ老病死の苦しみがある。人間に特殊です。例えば、孤独である、寂しい。これは人間にしかない苦しみです。どんな動物も老病死を持っていて、一定程度の苦しみはあるかも知れませんが、孤独だとかむなしいとか不安とか、そういう苦しみを苦しむのは人間だけです。そういう苦しみがどこからやってくるのかを問題にするのが、釈尊なのです。普通は考えないです。なぜ孤独なのだろうかといっても、せいぜい性格の問題にしたり、自分の考え方が悪い、とかにしてしまうのだけれど、釈尊はそうでなかった。人間だから寂しいのだと。人間として生まれたら、必ず老病死を前にして老病死を苦しむと。これが一つの人間を見る目です。

それでは、人間に生まれてよかったとどこで言えるのか。これが残りますね。実は、人間のみに苦しみがある、というところにヒントがあります。人間であるからこそ苦しむ。だから、逆に言うと、人間であるか

らこそその苦しみを乗り越えることができる。釈尊が仏陀になったということの中にその証しがあります。それはどういうことなんだろうか、それはわれわれがもっともっと考えなければならないことです。

この課題について、今日は津波と言うことで作文を通て考えてみたのですが、ともにあるということの喜びを子供たちは素直に綴っていましたが、自分にとってのよりどころとして、家族と出会えた喜び、この世の現実として喜んでいる、それは事実ですね。ともにあるということは、われわれの喜びであることに間違いはないのですが、しかしまた、ともにあるということがあるから、愛別離苦もあるし怨憎会苦もある。そういう意味で、ともにあるということは人間にとって課題でもあるのです。最初から、自然として、一緒にいることが成り立つのではない。人間にとって大きな課題で、学ばざるを得ない課題です。

もしもともにいる必要性を感じないのなら、苦しみはないはずですね。怨憎会苦も愛別離苦もなくなるのだから。苦しむのはどこから起こるかと考えると、それはともにあろうとするからです。ここに、ともにありたいという願いが最初から動かないものとしてある。ともにあろうとしなかったならば、憎しみも起こらないし愛することも起こらない。ところが、愛するということが起こったり、憎しむということが起こったりするのは、ともにあろうとする心があるからです。それを願っている心があるからです。だけど、願っている心のままで、ともにありたいと願っている心のままで、一緒にいることを成就していくことはできない。克服していかなければならない課題です。

津波の作文を通して考えさせてもらったことを、仏教の、釈尊の言葉と照らし合わせながら問題を展開させていただきました。

講演後の質疑応答

街が開いた、同じ時間の中にいた

早川　仙台の街が停電や不便なときに開いて、心を開いて、不便だからこそいろいろ互いに話したりしていたが、復旧するにしたがって家に閉じこもるようになった、ばらばらになっていったという話がありました。非常に皮肉な状態だと思うのですが、そのような不幸がなくともそのような開いた状態であればいいのにと思います。それから、子供の作文にも、今まさに生きているのが分かったとも書いてありました。地震や津波や不幸なことにあって初めてそういうことが分かるということは、本当に皮肉な不思議な気がしますが、そういうことがなしにそういう状態で皆仲良く暮らして行けばいいのに、われわれはそういうふうにできていないのでないかと思いました。

参加者Ａ　僕は先ほどの話しを聞いていて感じたのは、ミハエル・エンデの『モモ』の世界ではないのですが、時間の流れが違うのではないのでしょうか。不便になる、あるいはものがなくなると、人がそれぞれ持っている時間がゆっくり流れる。便利になると時間の流れが速い。そうすると人に余裕がなくなる。心にゆとりがない。人の心が開くのは時間が

緩やかに流れるときで、人の心が閉じるのはその人の持っている時間の流れが早いとき。お話を聞きながらそんなことを考えていました。

宮下　とても面白い言い方だと思います。そういうこともあるかも知れません。今、時間の流れが違うと言うことをお聞きして、もうひとつ思ったのは、同じ時間の流れを生きることができるようになったのでないか。単純に時間が遅くなったり速くなったりすることの他に、われわれは一人ひとりそれぞれ異なった時間を生きているのですが、電気が来ないものだから出て行かざるを得なくなり、同じ時間を共有するようになったのでないでしょうか。復旧すればそれぞれ個人の時間に戻る、明日は何をしなければならないとか、それぞれ違う時間を生きてばらばらになる。そんなこともあるかも知れませんね。

早川　わたしは泥だしボランティアに二度いきました。最初石巻に行って二度目は陸前高田でした。石巻に行ったのは震災から一ヶ月ほど経ったときで、陸前高田は6月でした。先ほどの閉じた開いたという話に関係することをいえば、最初の泥だしの時のことですが、地元の人もそれしかすることがない、それをすることが一番大事でそうしないと生活が進まない。時間の流れが速いとか遅いとかでなくて、同じことをせざるを得ないときに開いたというような感じになるのでないか。それから先ほどの作文のことになりますが、親を亡くすとか、そういう悲しい目に会わないと大切なことが分からないというのはとても悲しいことのように思えます。なぜそうなっているのか。

宮下　確かに悲しい目に会わなければ、大切なことが分からないという一面はあって、それは人間として仕方がないということでしたが、そうかもしれないけれど、僕は家族が大切ですよという話をしたいわけではありません。もちろん私たちはそういうことを求めているけれど、そうであるにもかかわらずそれが実現できないわれわれがいる、ということをいいたかった。むしろ、ともにあるということはなかなかできない、そうありたくてもできないものをわれわれはもっている。ともにありたいのだけれど、何か超えられないもの、距離のあるものがある。一緒に生活していても、なにかそういうものがある。それを超えたい、どっかで出会いたい、そういうものをわれわれは課題として持っている。

参加者B　閉じるとか開くとかが話になっていますが、閉じるというのは個人がそれぞれの道を行くということになりますか。

孤独な生活

宮下　まあ、そうだと思います。各人の道を行くことは、そのままみんなと開いていればいいのだけれど、われわれの現在の状況は一人ひとりが一人ひとりであったら孤立してしまう。一人ひとりが自分の仕事をすることは大事なことであろうが、心を開いたそういう光景はなかなか見られない。みんな孤独な生活をしている、それをよしとしているのが今の生活だと思います。こういうふうに、今ここでのように、皆集まって話をするというふうには街は開いていないと僕には思えます。みんながそれぞれ仕事をし出した場合。仕事することは大事です、人はそ

れぞれ別の仕事をしなければならないのですが、なんのために仕事をしているのか、やはりどこかでもう一度考え直さないといけないかも知れません。家族のため、生活のためというのはあるに違いないけれど、それだけになってしまう。他の家族もいるに違いないのに、都市生活ではそれは関係ない。田舎でもだんだんそうなっていく気はします。

参加者B　不動産屋が言っていたんですが、いいマンションを探すにはマンションの玄関口を見れば分かると。それは、いいマンションか悪いマンションかは、表にある掲示板に共同でやることがいろいろ掲示してあるマンションがいいマンションであると。それを聞いて、私は鬱陶しいマンションやなとおもいましたが(笑)。

宮下　それは両方分かります。両方持っているのですね。

震災後の復興

参加者C　3月11日のニュースから、テレビでは衝撃的な映像をずっと見ていました。福島の原発だけは私の解釈ではできないところがありますが、震災と津波の被害があったところについては、もちろんお気の毒で大変なことだと言うことは分かりますが、これを機会にあの地域は、あの人たちはもっともっとよくなるだろうし、あそこの子供たちはすごい立派な大人になってくれるだろうと思います。街も復興するだろうし。できなかった卒業式ができたとか、そういうニュースを見ていて、この子たちは絶対行儀も悪くならないだろうし、親不孝にもならないだろう、あるいはすごい人生を送るようになるだろうなというふうに思っています。

　というのは、この地域は昭和28年の9月25日に13号台風で壊滅的な被害を受けました。名田庄から小浜まで、南川の橋が流されてすべてなくなりました。私の家も、ほん屋もない蔵もない、小屋も牛も猫も鶏もなくなってしまって、本当に家の流れる時を知っています。やはり、寂しかったし、悲しかった。なんにもない河原で生活を始めた。

　ところが、今おっしゃったように、そのときはなにもなかったですから、電気も水道もなかった。濁った水をなんとか濾して使っていたり、河原から出てくる水がいいから使おうとか、箸も茶碗もないときに、木を削って箸にしたりしていました。道もない、田圃もないときから、今はこの名田庄地区は過疎地ですけれど、非常に整備されてよくなりました。もし、あの災害がなければ、このような村に絶対ならなかっただろうといつも思っています。役場も流れて、今でも、土地謄本なんかを見ると、ないことがあったり歴史が分からなくて困ることがあります。やはり、先人たちの苦労のおかげで非常によくなりました。よくなりすぎて、調子に乗ったら50年経ったあと、名田庄村は倒産してしまいました(爆笑)。大飯町に拾ってもらい(笑)、合併してこのような立派な建物も建ててもらいましたが、ちょっと調子に乗りすぎたのですね(笑)。

　でも、やっぱり、先輩たちの苦労はすばらしいものであったと思います。そういう感覚はわれわれより下の後輩にはあまりないし、同じような年代のものと話をして聞いていても、「ああ、大水だったな、家も流

れていったなあ」というような、家庭的にそういった不幸に会わなかった人たちの考え方は今でも違うように思います。

今日は福井からも来ておられるようですが、福井は昭和20年の空襲にあったし、23年の大震災にあって壊滅的な被害を受けました。ようやく立ち直って飯が食えるようになったときにまたやられた。平成7年の阪神淡路大震災の時にも福井の先輩方はよくおっしゃっていました。「たしかに大変な災害だが、現地の人から、ボランティアが来ないとか、食べ物がないとか、水がないとか、トイレに行けないとか、いろいろ聞くけれど、われわれの時は何もなかった、誰も来なかった、自分でやらなければ」と。

今度の大震災で大変な苦労をされた方の中から、これからの日本を背負って立つかたが必ず出てくるのでないかと思います。ただ、わけが分からないのは、福島の方、原発被害に遭われた方。私は怖さが分からないだけで怖いのですが、そういう被害の方は、頑張っていただきたいと思います。3月10日以前よりもすぐによくなると思います。

絆

参加者D　私は福井から来ました。今度の震災で人間の命のはかなさを実感しました。また、同時に人間の絆の大事さも実感しました。これを機会に教育現場においても社会においても、謙虚さを取り戻して、人間の絆の大切さを語り合うようであって欲しいと思います。今の政治を見ても、相手を敬う気持ちがないですね。若い政治家ほど先輩の政治家に対する言葉遣いが悪く、教育にとって実にマイナスだと思います。私は浄土真宗の生まれで、親父からいつも「どんなすばらしい家でも仏壇のないような家は小屋みたいなもんだ」と言われてきました。小さい頃から仏壇にお参りして育ってきました。

特に今日の世相というものは、本当に心の砂漠化の時代ですね。震災を通して人間のはかなさやあるいは人間の絆に気がついて欲しいですね。心の砂漠化については、新聞で毎日のように報道されていますが、形の上では残っていても親子の絆が全くないなど。家庭生活でも、二世帯の家族では、新しい家族は二階で生活している、両親は下。食事も別々。僕は、二世帯三世の家族が本当の家族だと思います。全く寂しい時代だなと。今度のことを機会に日本全体が互いに許し合う、優しい気持ちが生まれるようになるのを祈っています。心の砂漠化が少しでも癒されるようなそんな時代になるよう願っています。

宮下　今言われたように、この作文を読むと、東北地方ではおじいちゃんやおばあちゃんと一緒に生活していますね。おじいちゃんおばあちゃんが先に逃げて、あとでお母さんやお父さんがやってくる。お父さんお母さんは働いているということもあると思いますが。僕は大家族で過ごしたいと思うことはあるけれど、生涯子供たちとずっと生活するのもいやだなというのもあります。それはどういう問題なのか、難しいですよ。子供たちが孫を連れてきたら嬉しいですよ、しかし、再び同じ生活ができないような生活を始めてしまっているからなのかなという感

じもします。じゃどうしたらいいのか、それは優しさだけで解決する問題でないと思います。

参加者Ｄ　人間の傲慢さもありますね。人間の力は自然の力を絶対に超えられないことを今度の原子力の事故で学びました。あまりにも人間は傲慢だった。自然の力を制御できるというような発想はまちがいですね。

おじいとおばあ、子供の教育

参加者Ｅ　すみません、私、考えるのに、終戦からこっち、道徳教育が全然されていないので、人間を切り刻んで殺すなんて、そういう気持ちは全く分かりません。わたしなんか、あの災害で猫が放っておかれている、犬が放っておかれている、あの様子を見ただけで泣けるぐらいです。ものが言えないのはかわいそうだなと思うくらいなのに、親も殺す、子も殺す。終戦からこっち、道徳教育がないというのか、愛情が抜けているというのか、そんなふうに思うのです。

私は現在80歳ですけれど、息子が52でくも膜下で死んだのです。私は、考え方で、あの子は孝行してくれたな、と思っています。診療所の受付で死んだので、もしやうちで、「昼ご飯食べようか」と呼びにいったとき死んでいたら、私死ぬまで、あの子が、早う見つけて先生に来てもらえなかったのかなと思うくらいで、それで考え方で、あの子は私に孝行してくれて、元気に生きて行けと言ってくれたと思っています。

わたしは、しゃべりばばで通っているので、みんなと楽しくしゃべって老いるのやと思っています。男の人は勤めを辞めたら友だちが全然ない。うち、主人が75で死んだんですけれど、仕事に行っている間はかまってももらっていなかったですけれど、定年でいえにいるようになったら私のおるところはどこでも必ずいる(笑)。離れに行くと離れについて来る(笑)。それくらい男は寂し。男の人の考え方をもうちょっと変えて欲しいなと思います(爆笑)。おんなはしゃべってしゃべってだれとでも連れになるのに、男の人は勤めを辞めたらそれでしまい。付き合わなくなる。それで、これから先のことですが、電気が消えたらだれもご飯を炊けといっても炊けない。私らは石を積んでも炊く。いくら大学を出てきてもご飯炊けないようでは食べずにいなければならない。これからの子供には、ああいう災害があったときには、こんなふうに石を積んで、木を拾ってきてご飯を炊けよと、おつゆをたけよ、そういう教育をして欲しいと思います。原子炉が全て止まって電気が止まってしたらどうしてご飯を食べるの、お婆がおる間はいいけれど(爆笑)。おばあやおじいがおらんようになったらあんたらご飯も炊けないのだよ、そういう教育をして欲しいと思います。はい、すみません(笑)。

参加者Ｆ　先生のお話の中で、文明が進むにしたがって自然が壊れていくとわれました。よく分かりました。ありがとうございました。

今度の震災は人ごとでない

参加者G　今、すごくいい話を聞いて心がなごみました。確かに、子供たちには教育の中で生きるすべというのを学ぶことはすごく大事なことだと感じます。それと、東日本大震災についてですが、今までいろんな災害を見てきましたが、それらは自分のなかではなんとなく他人事で遠いものだったのです。でも、今回の東日本大震災は遠い地方で起こっている事なのに全く人ごとでないという感じがしています。もしかしたら、このようなことはいつ何時自分のところのことになるのでないかと思いました。自分は何もできなかったけれど、それでもその地方の人に自分の心は向かったし、何か自分はこの人たちにたいしてできることはないのかなと思いました。それは私だけでなくて、家族もそんなふうに思っていたし、まわりの人もそうだったと思います。あの震災を通じて、相手を思うこととか、家族のことを思うこととか、すごく大変な震災だったのですけれど、ものすごく学ぶことが多かった。私はあの震災以降、人の持っている心というのはこれからは変わっていくんじゃないかなと思います。人間関係ももっといい方向に変わっていくきっかけになったのでないかなと思います。

それと、さっきともにあるということをおっしゃっていましたが、ともにある幸せとともに、その裏側には苦しみがあるというようなことをおっしゃったと思うのですが、いままでそんなふうに考えたことはなくって、お話を聞きながら本当にそうなのだなと、紙一重というか、そんなふうに考えました。ありがとうございました。

大事なものを大事なものとして生きていくことは難しい

宮下　今言われたように、紙一重という感じはします。ともにあろうということから愛し合うことがあるのですが、一緒にいることをきっかけにして憎しみあうこともある。愛憎入れ替わる。根っこにはともにあろうとする心がある。そこから愛も憎悪もでてくる。なぜそういうことをわれわれは起こしてしまうのか、どういう心なんだろうか。大切なものだと喜ぶだけではすまないことを、僕らは持っているような気がするのです。家族は大事だという、それはもちろん間違いのないことだけれど、そういうだけでは大事なものを大事なものとして生きていくことは難しいのでないか。しばらくは行くかも知れないけれど、いつそれがダメになるか分からない。そうなる可能性はすでに持っている。ダメにしていくものを自分が持っている。自分が裏切っていくということがあるのですよ。

一緒にいることは今までは愛であったのにそれが憎しみに代わる、それは相手が悪いのでなくて自分自身のなかにある。そういうものを持って生きていているような気がします。そういうことから、さっき言われたような問題が起こっているのでないかと思うし、闇のようなものを僕らは抱えて生きているような気がする。われわれ自身がその闇を見つめないと、何か問題が起きたときに声をかけるほどのことができるた

めにも、闇を見つめる必要があるかなと思います。直接手をさしのべることはなかなかできないのですけれど、われわれがわれわれのところに持っている課題を解いていくことによって、間接的にでもいいから，彼ら彼女たちの未来のともしびになるように、生きて行ければいいなと思います。

直接なにかをしてあげることができるのならいいですが、条件が許せば、しかし、誰でもそうはできないので、われわれがいただいた課題、解かなければ行けない課題をよく見つめて明らかにしていく、それがわれわれがしておかなければならない仕事じゃないかなと思います。

何かやるべきことがある

参加者H　さっきの方の震災の感想、私も全く同じような感想を持ったのです。3月に震災があって、全国の人が自分たちは何かできないか考えるわけですが、同じように考えて、ただ現実は日々の仕事があり，行きたい気持ちはあるのですが、直接ボランティアには行けない。あの震災をきっかけに、自分自身でも、今まで考えていたことと何か違うことをやりたい、やるべきことがあるのでないか、そういうふうのことを考えるようになったのです。地震もそうですし、津波もそうですが、特に、原発事故が重ねてきたので、いままでは社会問題には全く興味がなかったのですが、戦後の流れなどを考えるようになって、今の時代があると、現状がこうなっているとか。震災後遠くにいて自分が被害を受けていないからこういうことを考えるということかも知れませんが、あの震災はとても大きな出来事だったと思っています。

参加者I　私の子供は茨城県の土浦にすんでいます。普通は通勤は40分くらいかかるところを震災の時は4時間ほどかけて自宅に戻りました。震災前は毎日コンビニに行って食糧などを買って、毎日そんな世活をしていたので、私は「こんな生活ではアカンで、何かあったら大変や」と言っていたのですが、コンビニがあるから大丈夫だと。それが地震が起こってコンビニに行っても何もなかった。4日間ご飯を食べずにいた。飲み屋さんに電話して、腹減ったといったらタケノコご飯を持って来てくれた。あんなおいしいことはなかったといっていました。お盆に帰ってきたので、米と炊飯器を持たせて帰らせました。それまでは、できたものだけを買ってそれしか食べずにやっていました。

私の姪は茨城県の北部にいて、震災後は子供連れて西津(小浜市)に避難してきました。今までいてこの間帰りました。測定器を持っていたので、西津で計ったらこっちの方が高かった(笑)。西津の方が高かったので、もううちには帰ってこないと思っているのです(笑)。

「頑張ろう」というフレーズ

参加者A　今日の演題は「生老病死、東日本大震災に思う」となっています。震災後にできたキャッチフレーズに「頑張ろう、日本」があります。あるいは、「頑張ろう、東北」。さっきの作文ではありませんが、例えば、

肉親を亡くしたとか、愛する恋人を亡くしたとか、子供を亡くした、財産をなくした、ローンで建てた家は流されたがローンは残ったなど、頑張りたくても頑張れない状況にあると思うのです。しかし、マスコミ、例えば野球を見ているとヘルメットに「頑張ろう」と書いてある。サッカーの垂れ幕には「頑張ろう、日本、東北」などと書いてある。

お尋ねしたいのは、この「頑張ろう」という言葉ですね。頑張れないときに頑張れない人に、「頑張れ」と背を押すときの、言われた方の苦痛。こういう状況にあるマスコミのあり方をどのようにお考えですか。

宮下　同じようなことを考えています。とても頑張れとは言えないのでないかとは思います。回りのものが「頑張ろう」と言うわけですが、そういう自分がどのようなところに立っているのか、ということはありますね。自分は自信を持ってそう言えるのだと言う人はそういうかも知れない。「頑張ろう」と。そういう目線で言うし、やり遂げられる人はそう言うのかも知れない。言われたように、悲しみの中にある人たちは頑張ろうにも頑張れないと思うし、本当にそう思います。それでは私たちはどんなふうに向き合ったらいいのか。「頑張れ」と叱咤するのはおかしいですね。悲しい身をどのように耐えようとしているのか、引き受けようとしているのか、そのようなことを静かに見る。ときには手をさしのべることがあるかも知れない。なるべくそばによって、してあげればいいなと思っています。

「頑張れ」と言うフレーズ、あるいはそういうこと、それは自分を許すためにしているのか、と思うこともあります。さっきどなたかがおっしゃったように、実際は何をしたいのか分からない、という気持ちはあるので、そういう気持ちを大事にして、それを「頑張ろう」とか「頑張れ」ということで消してしまわないようにするのがいいですね。「頑張れ」ということで全部終わってしまう。どうしてあげたらいいのか分からないでもたもたしている自分がここにいるのだから、そういうのを消さないようにする。自分の声を消してしまわないようにするのが大事だと思います。

つながっていること

早川　この「つなみ」の本にも書いてあったように思いますが、あるいは誰かから聞いたように思うのですが、例えば、ボランティアに行って、向こうの人から、遠くから来てくれたのがとても嬉しいといわれた。同じ行くにしても、遠くから、東京からよりも、大阪ですか福井ですか九州ですかと。行ってする仕事は同じ、むしろ遠くから行くと仕事する時間が少ないくらいです。「遠くから来てくれた」ということを喜ばれる。向こうを思う気持ちを持ち続けることが大切だと思います。

今度の原子力発電所のことはかつての仕事とも関係あるので、とてもけしからんと思って、できる範囲のことで関わっていますが、何かしていることで向こうの人と切れるということがない。いつまでも関わっているのは鬱陶しいし、こんなことは早く終わればいいと思いますが、そんなことには容易にならない。何かしていなければ忘れていくように思うの

で、我慢でないけれどやはりずっと何かしているべきだと思っています。

参加者D　僕はかつて教員だったので、仙台や福島に教え子がいます。すぐに励ましの手紙を出しました。みんな無事であると返事をもらったのは、2週間以上経ってからでした。3月の下旬ころまで本当に心配でした。すぐ出したけれど返事が来なかった。それでも、僕の手紙を読んで力が出たと書いてありました。そういう気持ちの投げかけだけはしたらなと思いますね。嬉しかったです、全員無事だったので。何もできないけれど、声かけだけはできた。それが非常に励ましになるように思います。こちらは何もできないけれど、気だけは落とすなと。

宮下　僕も友だちのところに行ってきました。「どうしている」というだけで、それ以上は何もないのですが、本当に喜んでくれました。

参加者D　共感ですね。

生老病死、なぜ生まれてきたのか

早川　もう少しになりましたが、今日の演題の「生老病死」の、生(しょう)が老病死の原因であるという話がありました。それはそうですね、生まれてこなければ「老病死」はないのだから。そうなると、いつも元に戻るのは、「なぜ生まれてきたのか」になる。「なぜ生まれてきたのか」といわれても、それは分からない。これは答えを見つけるための問いではないように思います。いくら考えても分からないし、気がついたらこの世にいたのだから。この問いには答えを出しなさいという問いでなく、問いを持ち続けなさいというような性質の問いでないかと思ったりします。問い続けることで、さっきの他の人とつながるきっかけができるとか、そういうことがあるのでないか。分からないことは分からないままにずっと持っているのが、答えでないかと。

宮下　この前の6年前もそうなんですが、出発点はどこにあるのか、問題はどこにあるのか、それが一番大事で、お釈迦様がそういう問題をもたれたとしたら、僕も同じようなところでそれを問うていきたい。お釈迦様がこう答えられましたと、答えとしての教えをどんなに聞いたところで僕は納得できない、あるいは納得する基盤がない。言葉を受け止める心がなかなか開けてこない。同じような問題をこんな心でこんなふうにして苦しむのだなとひとつになって問うていくときに初めて、答えとしてあった教えの言葉がああこんな意味かと時々開かれることがある。そういう意味で出発点、問いがとても重要だと思います。

ひとこと言っておきますと、人間としてなんのために生まれてきたのか、以下のことは答えとして聞いてもらっては困るのですが、仏教ではどういっているかというと、人間として生まれたと言うことは、地獄餓鬼畜生+物語的にいうのですが-に生まれるのでなくて人間に生まれた、我が身の尊さをそういう言い方でいう。なぜ地獄餓鬼畜生に生まれたらダメで、人間に生まれるのがいいのかというと、仏教的にいえば、地獄餓鬼畜生に生まれると苦しくって苦しくってしょうがなくて、仏法を聴く暇もない。仏法を聴く心も起こってこない。だから、人間に生まれてよかった。これはもちろん物語的ですが、そういう。仏法を聴くとは

どういう意味があるのかといえば、苦しみを超えていく道があると信じることができると。そういう心を起こすことができる。それが人間に生まれた喜びであると仏教は言っている。

それでは、この人間の苦しみ、それは何なのかという問いのところを、自分でよくよく問うて深めていかないと、「仏法を聴く」という言葉がなんでもないことになってしまう。「仏法を聴く」とは、苦しみを超える道があると思うことですが、その苦しみと言ってもそれは何かというと、先ほど言った孤独であるとか寂しさであるとか、そんなふうに生きざるを得ないような心、それはいったいどこからやってくるのか、それを超えるということはどういうことなのだろうか。そういうような問いがわれわれに与えられているのかなと、私は思います。

早川　話は尽きないと思いますが、時間になりましたので本日はこれで終了とします。ありがとうございました。講師の宮下先生に拍手でお礼にしたいと思います(拍手)。

資料

一・参加者（20名）

朝日年男、植茶英男、岡カネ子、奥菜穂子、奥泰子、奥裕治、
小西勇、小西まつの、治部ひろみ、下西孝明、菅原陽子、
高木広栄、団チエミ、堂脇馨、中野岩二郎、中野英二、
早川博信、早川真理子、森本小夜美、山本幸子

二・発言者

参加者A（50代、男性）、参加者B（50代、男性）、
参加者C（60代、男性）、参加者D（70代、男性）
参加者E（80代、女性）、参加者F（70代、女性）
参加者G（50代、女性）、参加者H（50代、女性）
参加者I（70代、女性）